

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 古代日本語文における
現実領域/非現実領域に関する研究

氏 名 小出 祥子

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、従来モダリティ形式として、非現実事態に関わることを前提に論じられてきた形式(助辞ラム、助辞カ)および、現実/非現実の観点からは注目されてこなかった「見る」の対象事態に注目し、それらを現実/非現実という観点から厳密に問い直した。その結果、上代日本語の言語体系において、現実/非現実および眼前/非眼前を対立的に示すシステムが存在することを明らかにした。

まず、ラムについて、終止形で文末に現れる形式および連体形で体言を修飾する形式について構文論的に考察を行った。ラムは、従来「現在推量」を表す助辞として論じられてきたが、考察の結果、ラムは推量に関わる非現実事態とは共起せず、専ら現実事態に関わることを明らかとなった。ラムは、推量に関わる助辞ではない。ラムは事態の非眼前性を表示する助辞である。この結論は、上代日本語が、事態の眼前/非眼前を対立的に表示するシステムを持つことを示唆する。現代日本語においては、現実事態である場合、眼前非眼前の別なく同一の形式で表される。

(1)【東京の大雨について愛知県で発言して】「東京では大雨が降っているよ。」

(2)【東京の大雨について(他地方の人に向けて)東京で発言して】

「東京では大雨が降っているよ。」

眼前にないことを明示する場合、(3)のように、非現実事態に介入する形式を使う他なく、眼前にない現実事態を表示する専用形式はない。

(3)「東京では大雨が降っているようだよ。」

現実事態における眼前/非眼前の対立を表す言語システムは、上代語特有のものである。

次に、現実/非現実の対立が上代内部でどのような変化を見せているのかを明らかにするべく、文末助辞カの様相を記述した。カは、現実領域の事態、非現実領域の事態の両方に介入する助辞である。カが関与する用例を通時的に考察することで、上代内部で現実/非現実の対立が変化している様相を以下のように描き出した。

①万葉集前期以前のカは、全て現実事態に介入する。

(4) 苦しくも降り来る雨か 三輪の崎狭野の渡りに家もあらなくに (03/0265)

② 万葉集後期のカは、現実事態および非現実事態に介入する。

(5) ひとものねのうらぶれ居るに 龍田山御馬近づかば忘らしなむか (05/0877)

この変化は、カ機能の及ぶ範囲が広がったことを要因として起こったものである。万葉前期以前において、カ機能は助辞モに及ぶことができなかった。(4)においてカが介入するのは「降り来る雨」であった。しかし、カ機能が及ぶ範囲が拡大し、事態に対する発話者の判断や評価「苦し」にもカ機能が及ぶようになった結果、カは発話者の判断や評価に関わる助辞として再解釈され、万葉後期には、発話者の判断に関わる非現実事態についても、カで表示できるようになったのである。また、更に時代が下ると、カはムなどの推量語を共起することなく、非現実事態を表すことができるようになる。以下は、古今和歌集の用例である。

(6) 秋風のふきあげにたてるしらぎくは花かあらぬか浪のよするか

(菅原道真、古今集 272)

例えば、(6)は「秋風が吹きまくっているところに立っている菊」という事態に遭遇して心に浮かんだ「本当に花か」「花ではないか」「寄せては返す白波か」という可能性が次々と述べられている。現実事態である「花」と非現実事態である「あらぬ」「浪のよするか」が、並列的に言表される形式である。中古語において、現実/非現実という対立は重要ではない。カは現実/非現実という判定を下す以前の心に浮かんだモノ事態に後接している。現実/非現実という対立が緩み、カが「不定性の表示」を獲得して行く現象に繋がる様相である。現実/非現実という対立において、上代日本語と中古日本語は異質である。現実/非現実という対立関係は、上代日本語の特徴を描き出すために重要な枠組みであることを確認した。

以上の議論を受け、現実/非現実という対立を上代日本語の特徴として捉え、更に眼前/非眼前の対立との関係を明らかにしようとしたのが以下の考察である。

眼前/非眼前の対立は、視覚に関わる認識である。そこで、視覚による認識を表す語として「見る」に注目し、その対象を現実/非現実の観点から考察した。現代日本語では、現実に成立していない事態も「見る」の対象となる。例えば、「来年の桜は絶対に見よう。」という文において、「来年の桜」は未来に成立する事態であり、現実には成立していない。しかし、上代語においては、「見る」という動作が未だ完了していない「見む」の対象に出現する場合、[体言]には現実領域に属する事態が現れ、[句]には非現実領域の事態が現れるという構文的特徴が見られることを明らかにした。

(7) 後見むと君が結べる 磐代の小松がうれをまたも見むかも(又将見香聞)

(02/0146、柿本人麻呂歌集)

(8) 霍公鳥来居も鳴かぬか 我がやどの花橘の地に落ちむ見む(地二落六見牟)

(10/1954)

(7)において、「見む」の対象は体言「磐代の小松がうれ」であり、それは現実に成立している。それに対して、(8)では対象が「我がやどの花橘の地に落ちむ」と準体句で示されており、その対象は非現実の事態である。

この傾向を受けて、「[体言](ヲ)見ム」と「[句](ヲ)見ム」の違いを構文論的に明らかにするべく、目的格に現れる準体句を対象として考察した。その結果、目的格に現れる準体句がもつ特徴として、以下が明らかになった。

(9)うち靡く春来るらし山の際の遠き木末の咲きゆく見れば(開往見者)

(08/1422、尾張連)

(10)秋の露は移しにありけり水鳥の青葉の山の色づく見れば(色付見者)

(08/1543、三原王)

準体句が目的格に出現する場合、そのほとんどが「見る」を含む述部用言の対象を表す。更に、そのほとんどに「心的内容」を表す主節述部が共起し、準体句の内容は、主節述部が表わす「心的内容」を引き起こす契機を意味する。これは、目的格に現れる体言には見られない特徴であり、目的格を成す準体句特有の現象である。ただし、「[句](ヲ)見ム」には、「心的内容」を表す述部が共起していない。

(11)霍公鳥来居も鳴かぬか我がやどの花橘の地に落ちむ見む(地二落六見牟)

(10/1954)

このように心的内容と共起しない用例は、準体句にかかる直接の述語が「見む」「見ず」という推量と打消しを含む場合に限られることに注目した。「見む」「見ず」は、対象への認識が成立していないことを意味する。「[句](ヲ)見ム」という形式においても、準体句は心的内容の契機を表しているものの、未だその事態への認識が成立していないため、心的内容が起っておらず、現象上には心的内容を表す述部が共起しないという考えを述べた。以上の事実から、「[体言](ヲ)見ム」における[体言]は、視覚の対象としての意味役割を持つのに対し、「[句](ヲ)見ム」に介入する「句」は、「心的内容」の契機を表すということになる。上代日本語において、視覚の対象となる事態は、現実事態に限られるという結論を得た。

上代日本語の体系において、視覚と現実性は深く関与する。上代日本語における現実領域と、視覚的に認識できる範囲は重なっていたのだろう。そして、その範疇外にある現実事態には、特定の形式を以て表示する必要があった。それが、視覚的に認識できない現実事態を表示する助辞ラムである。上代日本語において、現実/非現実と眼前/非眼前は深く関わっているといえる。

また、事態の現実/非現実と眼前/非眼前は、山田孝雄の言う喚体句(感情表現形式)の体系にも関わる。このような喚体句の整理も、本研究の成果の一つである。

感情表出	眼前/非眼前	現実/非現実
感動	眼前	現実
希望	非眼前	非現実
愛惜	非眼前	現実